

## 市長定例記者会見 2010年2月9日

- ・ 日 時 平成22年2月9日（火）午前11時00分～
- ・ 場 所 本館3階第1会議室
- ・ 記者数 14人

### 議題 「坂の上の雲ミュージアム第4回企画展テーマ展示」について

#### 総合窓口センター（市民課）の時間延長等について

（市長）

まず、坂の上の雲ミュージアムの第4回企画展テーマ展示について説明させていただきます。坂の上の雲ミュージアムの来館者は、平成19年4月の開館後、順調に推移しており、特に昨年の11月末からは、スペシャルドラマの放送が開始されたことも相まって、12月の来館者数が昨年の約4倍、1月も3倍超ということで、今年の1月16日には当初の見込みより早く、来館者40万人を達成いたしました。また現在開催中の秋山好古展につきましても、さまざまな方面から大きな反響があり、多くの皆さん方にミュージアムを通して『坂の上の雲』と松山に対する関心を寄せていただくきっかけになったものと実感しています。ご存知のとおりミュージアムでは、毎年新しいテーマを設けて、全面的に展示を入れ替えていくことにしており、これまでも司馬遼太郎氏が小説『坂の上の雲』の中で追求された「近代国家とは何か」ということに焦点を当てながら展示を行ってまいりました。そこで今回の企画展につきましては皆さん方にも関連があるのですが、「日露戦争と明治のジャーナリズム1 新聞『日本』と子規」をテーマに、3月2日火曜日から来年の2月末まで開催する予定でございます。明治における新聞を中心としたメディアの成立と発展は、国民意識を広めていく上で大きな役割を果たしており、今後ミュージアムでは、近代国家を語る際の重要なテーマとして、日露戦争を明治時代のジャーナリズムの視点からとらえる「日露戦争と明治のジャーナリズム」を展開したいと考えております。そして今回の展示では、明治の言論界を代表する新聞日本とその日本新聞社の記者として生涯を終えた正岡子規をはじめとする、この新聞にかかわりを持つ人びとに焦点を当てながら、俳句、短歌の革新のみならず、文章日本語の形成において子規が果たした重要な役割や開戦期を中心とした内外の報道記事を通して、世界が当時、日露戦争をどのようにとらえていたかということなど、展望していくことといたしております。いずれにいたしましても、スペシャルドラマ放送というまたとない機会でありますので、より多くの皆様方に『坂の上の雲』の魅力を体感していただくため、今後とも成長していくミュージアムとして充実した企画展を開催していきたいと思っております。なお詳細につきましては、この会見終了後、ミュージアムの松原館長の方から説明させていただきますので、よろしくお願いいたします。

次に、総合窓口センター、これは市民課の担当になりますが、この時間延長等について説明させていただきます。本市では「やさしくて便利な窓口づくり」を目指して、平成12年11月から本館1階市民課におきまして、戸籍届や住所変更に伴う関連手続きを同じ窓口で受け付けるワンストップサービスを実施しております。このたび、このワンストップサービスの一層の充実を目指し、仕事などで平日の昼間に手続きにお越しいただけない方にも利用していただけるよう、総合窓口センターにおいて窓口の時間を延長するとともに、土曜日にも窓口を開けることといたしました。閉庁時の市民サービスにつきましては、これまでも平成3年から三越松山店、フジグラン松山、いよてつ高島屋内に開設した市民サービスセンターにおきまして、証明書の発行などのサービスを実施し、年間約10万人の方々に利用いただいております。しかしながら市民サービスセンターでは、戸籍届や住所変更等の手続きを取り扱っていないため、そうした手続きのためだけに仕事を休むことができないなどの理由から、平日の午後5時以降や休日の手続きを望まれる声が聞こえるようになっておりました。そこで、すでにワンストップサービスを実施している総合窓口センターにおいて、そうしたご要望にお応えできるのではないかとという職員提案が3Cプロジェクト（check challenge change）においてなされまして、庁内で調整を進めた結果、実施に踏み切ることといたしました。まず、引っ越しなどのシーズンで届け出が多くなります3月27日土曜日と4月3日土曜日に臨時的に実施いたします。さらに4月からは定期的に、毎週木曜日は午後7時まで延長し、そして毎月第2土曜日は午前8時30分から午後5時まで受け付けすることといたします。なお休日に定期的に窓口を開ける自治体は県内では初めてとなります。これからも窓口サービスの充実に向けて積極的に取り組んでまいりますので、よろしくお願いいたします。

最後にお知らせがございます。先般の記者会見において、松山城二之丸跡から出土したルーブル金貨をご紹介いたしました。そのとき、日露戦争当時のロシア金貨に刻まれていた日本人と思われる名前について、「タチバナ カ」「タチバナ チカラ」、どちらか分かりませんが、そのような名前ですと発表しておりましたが、その後の調査の結果、「タケバ ナカ」の可能性が強くなりました。金貨には名前を彫り込む前に釘のようなもので書いた下書きがわずかに残されており、「タチバ」ではなく「タケバ」となっていること、また当時の海南新聞によりますと、ロシア将校ミハイル・コステンコさんが収容された衛戍（えいじゅ）病院、その後、移送された城北練兵場の病院に同じ時期、竹場ナカという人が勤めていたことも確認できました。いわゆる患者と看護婦として知り合ったものと思われます。新聞記事では、竹場ナカさんは日本赤十字社愛媛支部の看護婦さんで、明治37年10月、宇和島に帰っておられます。ミハイル・コステンコさんは、同年12月に静岡へ移っておりますが、お2人のその後の消息については分かっておりません。金貨には、男性と女性の名前が刻まれていたということでございます。

議題の詳細につきまして、担当のほうから説明させていただきます。

（質問）

出土された10ルーブル金貨について再度精査したというのだが、これは市が実施したのか。

（市長）

そうです。 当時の海南新聞を読み込んでいきましたら、竹場ナカさんの記事が見つかりまして、それで判明しました。そこから先はプライベートな話なので、ご理解いただきたいと思います。

（質問）

こちらに、添付しているのがその記事か。

（市長）

そうです。

（質問）

竹場ナカさんは非常に美しい方だったのか。

（市長）

そのようです。

（質問）

筆跡についてだが、「ケ」を「チ」に見えるように彫っているということは、2人の名前をロシア人の方が彫っているという見方ができるのか。

（市長）

その点は分かりません。

（質問）

金貨について、今後もし遺族を探すなど何らかの調査はするのか。

（市長）

120年前のことでプライバシーにも関わることでありますから、今の段階ではここまでです。

（質問）

もう少し詳しく知りたいという一般の方もいるかもしれないが、どう考えているのか。

（市長）

海南新聞の記事から読み取っていただければと思いますが、引き離されたような形跡が伺えます。

（質問）

この添付している新聞記事の中に、このほど解囃となっているが、そのあたりなのか。

（市長）

いろいろな想像はできます。やはり当時の世相からすると、国を越えての恋愛というものは、社会が許さなかったという背景があったのかもしれませんが、その思いが凝縮されたのが、2人で刻んだ金貨というのが本筋なのかという気はします。

（質問）

第3の水源を求める市民の会の署名活動について、最近その活動が活発になってきているが感想を伺いたい。

（市長）

今までの経緯で言えば、松山の誠意と松山市民の声が聞こえないということが言われ続けていましたので、その声をもし何らかの形で挙げていただけたらというきっかけ作りをさせていただいたのですが、それを受けて第3の水源を求める市民の会が立ち上がり、市民の声を出そうという行動に移されたことに、本当に心から敬意と感謝を申し上げたいと思っています。

（質問）

集まった署名をどのような形で西条市長に提出するのか。

（市長）

これは分かりません。ただ一般論で申し上げますと、声が挙がっていないということに対してのメッセージにはなると思います。

（質問）

先日、市民の2グループが、松山市としては第3の水源として県営西条工水からの分水という計画にある水使用の試算が過大ではないかというような主張をしていた。そのグループの試算では県営西条工水からの分水というのはどうか、ほかの水源を考えるべきなのではないかということだったと思う。これについて市長の見解を伺いたい。

（市長）

2つの団体のうち1つは、よく問い合わせに来られる団体だと思うのですが、私どもも幾度となく、その団体の主張する資料の矛盾点について指摘させていただきました。しかしそれに対しては何らリアクションがないので、あくまでも最初にその団体の考え方で算出した資料に基づいて、行動を起こしているだけです。ですから歯車がかみ合わないということは間違いありません。ただその矛盾点については、我々は幾度となく指摘していますので、その点については、なぜそこに対して思いをはせていただけないのか残念に思っています。とりわけ水につきましては、重箱の隅をつつくような算定は無理ですが、やはり我々はこの10年間の経験則、全体の構図から見て、その数字を算出しております。もちろん年間通じての市民1人当たりの使用量も年によって紆余曲折があると思いますし、その団体の方々の主張で一番欠落しているのは、地下水はすべて今までどおり安全、未来永劫安全であるという

前提に立って物事を考えておられるのです。ところが例えば松山市の伊台や湯山の方へ行けば、地下水の水質に非常に不安を感じている声、そしてできれば上水道の計画に入れてほしいという根強い声があるわけです。そうしたニーズにも応えていかなければなりません。その団体が主張されているとおりにするならば、今申し上げた方々には今までどおり地下水で我慢なさいというところから脱出できないと思います。ですから、スタート地点が全然違うのではないかと考えています。それともう1つは、何と言うのですか、本市はあくまでも1日最大で4万8,000立方メートルを必要水量としておりますが、本当を言えばもっと欲しいです。投資額は変わらないので、もし可能だったら6万立方メートルでも7万立方メートルでも、あればそれにこしたことはないです。でも、それではやはり相手の方にご理解いただくことはできませんので、最低限4万8,000立方メートルをなんとかお願いできないでしょうかというお話をしています。投資額は変わりませんから、水量が減れば減るほど、水の単価はどんどん上がっていきます。こうした点について、主張されている方々はまったく考慮されていないのではないかと感じています。

(質問)

その後、第3の水源を求める市民の会や西条市とコンタクトは取ったのか。

(市長)

今は本当にそのまま推移を見守っている段階です。

(質問)

国政の話になるが、民主党の小沢幹事長が政治資金の問題で不起訴にはなったが、今週も国会で議論が始まり、幹事長を続投するということについてなど、いろいろ批判の声が出ている。市長はこの一連の問題とその対応について、どう見ているのか。

(市長)

とにかく、説明不足ということは否定できなかったと思います。やはりそうした問題が起こったときには、率先して説明されれば、誤解とか推測によってさまざまな情報が膨らんでいくことはないのではないかとということが1つあります。もう1つは、法的な問題とは別に政治家としてのありようということで、いろいろな意見が出てきていると思うので、それをどうするかについては、例えば企業・団体献金の廃止であるとか、こうしたことの議論をすると言っていますから、国民が納得できるような制度へ、さらにステップアップさせていくという作業に、速やかに臨むべきではないかと思っています。

(質問)

民主党内から、そういう動きが小さいのではないかとというような指摘もあるようだが、それは感じるか。

（市長）

わたしはその現場にいないので分かりませんが、皆さんが考えていることを伸び伸びと堂々と言って議論を交わしたらいいと思います。

（質問）

国政とスケールは違うが、同じ政治と金の問題というか、松山市議会でも兼業自粛の話が話題になり、まもなく報告されると思うのだが、今後市議会議員選挙もあるし、市としてどう見ているのか。わたし自身は正直、なぜこのような細かいというか、大騒ぎする話なのかと感じ、もっと手前の話ではないかと思うが。

（市長）

これは議会がお決めになることなので、わたしには分かりませんが、ただおっしゃるとおり、本当に何と言うのですか、先ほどの話ではありませんが隅っこをつついて、どうだ、こうだという議論があったような印象はあります。だから、もう少し大きな本質的な議論の方が分かりやすいのではないかという気がします。

（質問）

水の話に戻るが、西条市には行ったのか。

（市長）

まだです。

（質問）

予定はどうか。

（市長）

署名の推移を見守ってからです。

（質問）

事務レベルでの話はしているのか。

（市長）

連絡は取り合っていると思います。わたしもいろいろな会合で西条市長にはお会いしています。

（質問）

愛媛マラソンで走ったあと、例えば来年は、松山市として何か関連したイベントを開催したいというような思いはあるのか。

（市長）

今回、市として初めて取り組んだことなので、いろいろと対応等に苦慮したところはある

のですが、総じて鉄道会社、警察、市民ボランティア等々のご協力というものの元に、非常に楽しい参加型の市民マラソン大会に脱皮したのではないかと感じました。もし、わたしが本部席に座って皆さんのゴールを待っていたら分らなかったと思うのですが、わたしも走ったことによって、それぞれの地域でいろいろな方々が関わっており、中には給水所でお手伝いされていたり、沿道から声援を送っていただいたり、本当に多くの人たちがつながっていくんだなということを改めて実感いたしました。一番感じたのは地域ごとに何をしようかと、特に北条地域、非常に地域コミュニティの活性化にまでその影響というものが及んでいるということが実感できましたので、単にマラソン大会というよりは、地域のみんながつながっていくイベントのような形で育っていけばいいと思います。そのためには、例えばもう少し早めに申し込みの期間を設けたり、あるいは招待選手の充実を図ったり、より一層脚光を浴びるような努力というのは、今後とも積み重ねていくべきではないかと思っています。ただこの10日間いろいろなところで話を聞くと、来年は出たいと言う声がすごく多くなっているので、たぶん来年、5,000人は間違いなく超えると思います。

(質問)

先日、アートステーション「おいでんか」が所有者の都合で閉鎖になるということになり、新しい場所を探しているところだと思うのだが、この閉鎖についてどう考えているのか。また市長自身があのような文化事業に対してどういう形で支援していくのが望ましいと考えているのか、基本的な考えを伺いたい。

(市長)

NPO等々の活動については、市としていろいろなサポートシステムを作ってきました。例えば、立ち上がり支援事業であるとか、成熟支援促進事業です。こうした団体を支援する場合、一番大事なのが公平性だと思いますから、セレクトするためには公平な立場の方の審査会というものを通じてご決定いただく仕組みも出来上がっています。さらにもう1つは、マッチングギフト方式の寄付制度、これも数年前に作りました。税制の優遇措置が適用される認定NPO法人が少ないため、企業や個人がそれ以外のNPO法人に直接寄付しても優遇措置がありませんから、それを松山市が代わりに受けます。松山市であれば税制の優遇措置を受けることができ、そして寄付いただいた金額と同額を市が上乗せして基金にする仕組みも作りましたので、あくまでも公平な立場でサポートをしていくつもりであります。ただこの特定のところに特別なサポートということになると、これはなかなか難しい面もあり、今の段階ではご質問に答えようがないのですが、実はあそこの活動は空き店舗対策の制度も活用した上で立ち上がっていましたので、そういう意味ではかなり松山市としてもサポートはしてきたいきさはあります。ただこれは所有者の問題であり、そこから先は民間同士の話になりますので、そこに官である市が割り込んでいくことは、不可能だと思います。ですから、できれば同じような条件で活動できる場所が見つかることを、本当に期待をしているところです。